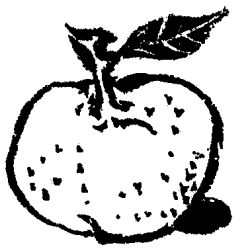
みだくなし長者（ちょうじゃ）

吉田タキノ作　中込　漢絵

だくはし長者（ちょうじゃ）

山タキノ



創作／子どもの文学

みだくなし長者

N. D. C. 913　　偕成社　150p.　22cm　1973年

発　行　　1973年

著　者　　吉田タキノ（よしだ）

発行者　　今村　広

発行所　　株式会社　偕成社

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5

電話　(03)260—3221（代）　〒162

振替　東京1352番

印　刷　　新興印刷製本株式会社

製　本　　文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-621060-0904　10

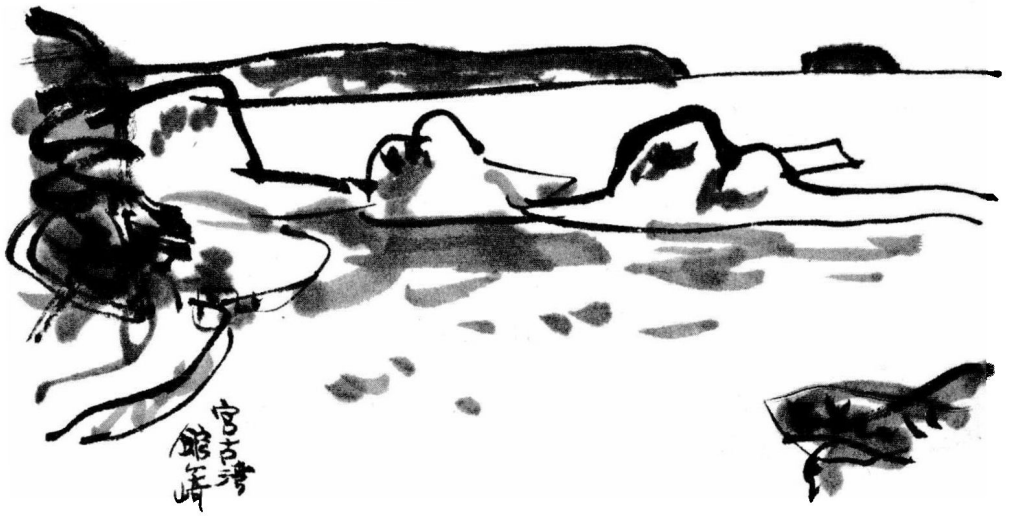
©吉田タキノ　1973

はしがき

ひとつのながい道すじ――閉伊街道を、わたしはてくてくあるく。自動車も自転車もない時代だから、わたしの二本の足だけがたよりだ。

スタートしたのは、わたしのふるさと。そこから、あるきだして、いくさきざきにおこるいろいろのことを、はなしてみたい。

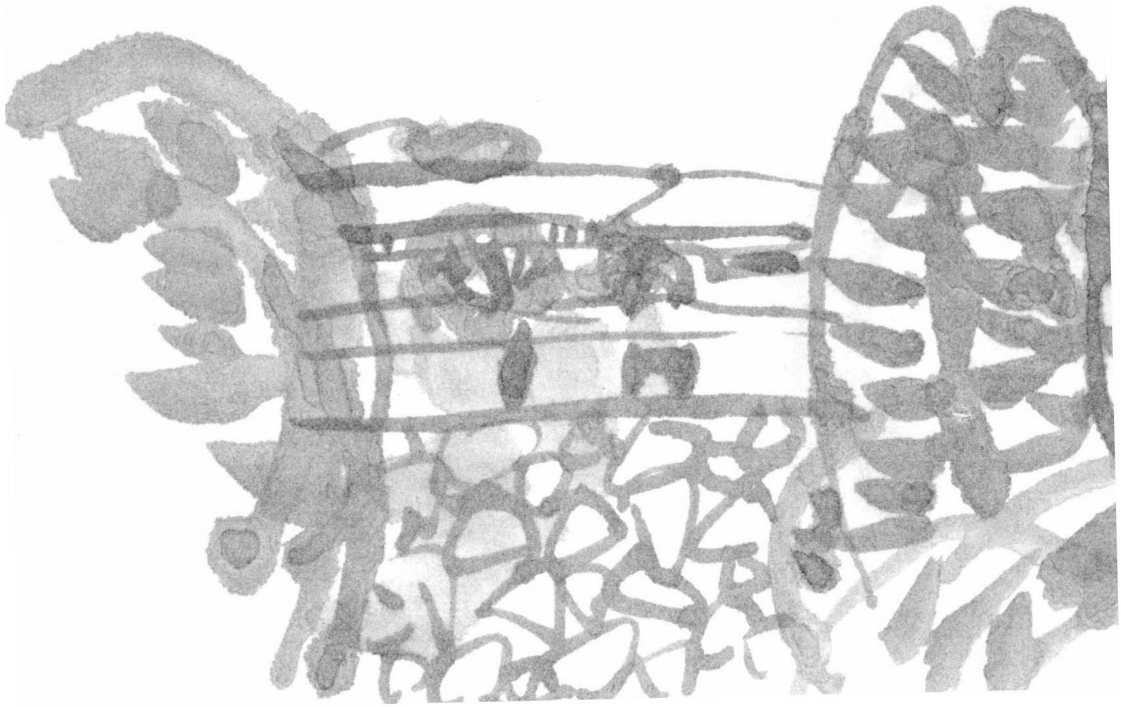
ジェット機時代に生まれたあなたも、きょうは、わたしといっしょに、じぶんの足で、東北地方の土の上を、あるいてみませんか。

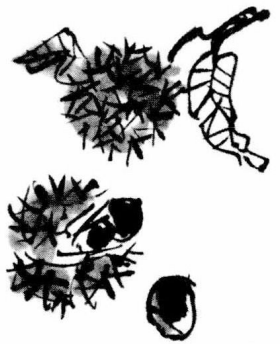


试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

みだくなし長者／もくじ

第一話　はなわとのさま　6
第二話　消えた稲ばせ　26
第三話　すったまぬけ　38
第四話　はたおりひめ　55
第五話　みだくなし長者　67
第六話　石工の熊吉　85
第七話　黒雲ばけもの　108
第八話　三日月おしょう　128
第九話　おしまいのはなし　143
閉伊街道の昔ばなし〈あとがき〉　148





作者・吉田タキノ

岩手県宮古市に生まれる。井野川潔・早船ちよ氏に師事し小説，童話を書きはじめる。新作家協会，日本児童文学者協会に所属。著書には『ふるさとの民話』『ざしきわらし』『また来た万六』その他。現住所／埼玉県所沢市久米1213喜楽荘

画家・中込　漢

本名川合幾郎。1916年岡山県に生まれる。タブロー制作のかたわら，雑誌，単行本のさし絵などに活躍。たびたび個展を開いている。元創元会会員。現住所／東京都練馬区高野台3-15-22

みだくなし長者

吉田タキノ

第一話

はなわとのさま

一

いちばんはじめに、とのさまのはなしでもすることにすっか。

延宝八年（一六八〇）七月十八日のことだったんだぁよ。

江戸城のなかの大広間には、きみわるいほどに、はりつめた空気がながれていたど。

大老酒井雅楽頭さまをかしらに、老中たち、幕府のおもだった人たちが、きんちょうしきった顔つきをしてひかえているんだ。

譜代（まえから代々徳川家につかえたけらい）、外様（関ケ原の合戦以後徳川家につかえたけらい）と、日本国じゅうからあつまった三百の諸大名が、威儀をただして、席にすわっている。

徳川四代将軍家綱は、五月七日に死んだけど、かれには子どもがなかったんだよ。

つぎの将軍さまを、いそいで、えらばねばならないんだ。候補にのぼったものは、ふたりいる。

家綱のおい〈甲府宰相〉と、家綱の弟〈館林殿〉とさ。候補者のうしろには、大きな利権がからみあい、ふたりをおす二つの力が、にらみあっていて、ついにどちらとも、きめかねていたんだなあ。

そんだもんで、徳川幕府はじまっていらいの重大な人事が、きょうこの席できめられることになってしまったんだよ。

それは、将軍の公選とでもいおうかな。天下の大名たちの多数決によって、つぎの将軍を、どちらかにきめようという、とりきめになったんだから——。

大広間をうずめつくした三百の諸大名にむかって、酒井大老から、おもおもしい発言がされたど。

「将軍家、お世つぎのことについて、諸公にはかりもうす。甲府どの、しかるべきや、はたまた、館林どの、しかるべきか、おのおのがたのご意中、はばかりなく申しのべられたし……」

きみわるいほどのしずけさにみちていた広間のなかを、さあーっと、音のない波のうねりがはしったど。

（さあーっ、たいへんなことに、あいなったぞよ。）

将軍公選のことはわかる。だども、無記名投票ではないんだもんな。おおぜいのなかで、発言して、その発言の数によって、つぎの将軍がすいせんになる。これでは、うっかりした発言はできないじゃないか。じぶんのすいせんした候補者が、将軍にならなかったらどうしよう。新将軍から白いまなくたま（目玉）で、にらまれるのは、きまりきってるじゃないか。

「……」

三百の諸大名は、にわかおしになったみたいに、だんまり戦術をとっている。

酒井大老をかしらにいただく、幕府のおえらいさまたちも、くちびるを、ぐいとむすんで、だまりこくっているんだ。

「……」

むかしの暦の七月十八日。真夏だというのに、大広間の空気が、だんだん、つめたくひえていくのさ。

ぜんぶの人たちは、つめたい石の仏さまみたいに、だまりこんでいても、心のそこでは、ありとあらゆる計算を、はたらかせていたんだぁよ。

ときがすぎて、みんなのはりつめたおもいは、絶頂にたっした。もうはあ、どうに

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

もいきぐるしくなったとき、一座のなかから、かるいせきばらいがおきて、ひとりの大名が、すっくと立ちあがったど。

（ありゃりゃ、立ったぞ、立ったぞ！）

くるしい、ひきしまった感じが、すこしやぶられたんで、諸大名のまなくたまは、いっせいに、その人にむけられたどさ。

着ている礼服の〈向かいツル〉の定紋が、目にたった。

南部藩（いまの岩手県）のとのさま、南部大膳大夫重信だったんだよう。

色の白い、ほっぺたの肉のゆたかな、しもぶくれのかおだちだ。六十いくつかの老人ともおもえない、よくとおる低音で、重信はじぶんの信念を、しゃべりはじめたんだぁよ。

「征夷大将軍、第五代徳川将軍家には、館林どの、ご相続あってしかるべし、とぞんじあげる。ご列席の諸公のおむねのうち、いかがにそうろうや……」

そのせつな、ほうーっ、という大きなためいきが、諸大名の口から、もれてでたど。

まなくには見えないが、よろいかぶとに身をかためていたような、諸大名の心の城壁に、はっしとばかり、くさびをうちこんだ重信。

はりつめていた空気が、にわかにゆるみ、大広間のなかを、さわやかなすず風が、

どっとふいてとおる感じだ。

こうなれば、もうはあ、えんりょなんかいらない。

「われらも、南部公のご意見に、同意つかまつる。」

と、さんせいの意見が、たくさんでてきたど。

東北の盛岡城のとのさま、南部重信の勇気あることばによって、ここに、ぜったい多数で、館林どのは、第五代の徳川幕府将軍に、きまったんだぁよ。

それは、ひとつの大きな運命の星が、きらめきだした時間であった、といえるだろうな。

館林どのすいせんの、さいしょの口火をきった重信のむねに、そのとき、どんなおもいの火が、もえていたか。本人いがいのだれが、わかってたかなあ。

二

重信は、南部二十七代利直の第五番の子どもだったんだぁよ。

せけんの人は、重信のことを〈はなわとのさま〉とよんだのさ。重信が生まれたのは、盛岡ではなく、南部の海岸町、宮古の在所、花輪村だったんだからな。

つまり、おらが郷土の生んだとのさまさ。

元和元年（一六一五）に、二十七代南部利直公は、宮古の沿岸を見てまわったんだが、そのとき、利直のそばちかくつかえた、花輪内膳のむすめ〈松〉が、重信の生みの母上なんだぁよ。

重信は、おさないときの名を〈鍋丸〉とよばれて、十四歳まで、生まれた土地の花輪にすんでたんだぁよ。

十五歳になって、やっと盛岡城に、うつっていき、花輪重政と名のって、知行二百石をもらったど。二百石の知行といえば、ひらのさむらいとおなじくらいだなあ。ひとりだちした若とのさまとしてはあつかわれずに、部屋ずみの身分だったんだな。

ところがさ、重政が三十三歳になった年、さいしょの運命のかわり目がやってきたのさ。

南部家の一族である七戸隼人が死んだため、世つぎのない七戸のあとめを、重政がうけついだ。名まえも七戸隼人正とあらためて、七戸のお城にすみ、知行は十倍高の二千三百石をもらったど。

それから十六年目。重政の上に、第二の運命のかわり目がおとずれた。

隼人正、四十八歳の年、寛文四年（一六六四）、九月十二日。十一歳上の兄、南部藩主山城守重直が、江戸やしきで死んだのさ。

とのさまがなくなれば、その子があとをひきつぐきまりであるんだが、重直の子ははや死にしたため、お世つぎがいなかったんだ。

そのうえ、重直は、その生きているときに、あとめをだれともさだめない。幕府にたいする勤めにも、たいへんなまけがちな人だったど。江戸幕府の政策のひとつとして〈参勤交代〉という制度があったのを、知ってるべい。各国の大名たちはじぶんの国から、一年おきに江戸にいって、将軍家にごきげんうかがいをする。だから、江戸と国もとと、二か所に、大名のやしきは、おかねばならなかったんだぁよ。

重直は、参勤交代のきそくを、よくまもらない。そのほかにも、いろいろ幕府の怒りや、ごかいをまねくようなおこないがおおかったもんで、なんども幕府から〈ひっそく〉を命ぜられていたんだぁよ。〈ひっそく〉というのはな、さむらいにかけたひとつのかるいおしおきでな、門をしめて、昼間の出入りをゆるさないものなんだぁよ。

こんなふうに、幕府からにらまれていた重直が死んだあと、世つぎがきまってないとなれば、南部藩は、こののち、どうなるか、わからねえ。

徳川時代にはな、大名に世つぎがないと、幕府は、かんたんにその家をとりつぶしたもんだ。つぶさないまでも、ろくだかを、へらして、その勢力をよわめることが、幕府のねらいだったわけだぁな。

二十八代重直の死んだあと、南部家をつぐのは、だれなんだか。
南部一族ちゅう、いちばん身分のたかい、八戸弥六郎を、本城のとのさま候補に、おすものが、まっさきにでてきたど。
「いやいや、八戸どのでは、おかしいではないかい。先君の弟君、七戸隼人正どのこそ、しかるべきお世つぎではないかいな。」
と、いいはるものも、でてくる。
「いや、七戸どのより、中里数馬直房どのこそ、しかるべきお世つぎと見うけたり……」
と、ひいきぶりを、はっきするものもでてくる。まるで三つどもえのさわぎだ。
そうしているうちに、
「幕府の政策として、徳川親藩の水戸さまから、お世つぎがくるそうだなはんて。」
「まったくぬけめないなっす。幕府のご政策で、おとのさままで、おせわしなさるそうだなっす。」
という、下じもののうわさまでながれだし、南部家は、上を下への大そうどうとなったど。
はやく世つぎがさだまらないと〈お家とりつぶし〉は、目のまえにせまってくる。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com